

公開講演会

第80回 公開講演会 「遙かなる長安城」

1997年5月24日

◆佐川正敏：遣唐使が見た大唐の臺

5つのテーマについて報告したが、ここでは以下の2つについてだけ簡単に紹介する。

1. 屋根の形と色 唐代の建物の屋根は、切妻、入母屋寄棟の順に格が高い。長安城大明宮の含元殿の屋根は寄棟と推定される。瓦は磨いて燻し焼きした黒色瓦を葺いていた。屋根の縁周りである鴟尾を含む棟には、緑釉瓦を葺いたという見解は、緑釉熨斗瓦の点数が少なすぎるので、疑問である。平城宮第一次大極殿用の瓦は黒色瓦であり、藤原宮の灰色の瓦とは異なる。粟田真人ら遣唐使が702年に大明宮をみて、採用したのであろう。

2. 屋根に葺いた各種の瓦 とくに蓮華文軒丸瓦は八世紀以後退化するが、それによって含元殿の軒丸瓦は、七世紀中頃（龍朔～麟徳年間）の創建用、八世紀中頃（天寶年間）の大規模修理用、八世紀末（貞元年間）の群発地震修理用、九世紀以後に分けられる。また、ほぼ同時期に創建された麟徳殿や三清殿の軒丸瓦のなかには、これらと同範のものがある。

これらは筆者が1991年に日本学術振興会から社会科学院考古研究所に派遣された際の研究成果である。このような方法による研究は中国ではまだ一般化していない。

◆町田章：大明宮含元殿と平城宮大極殿

平城宮跡発掘調査部は、唐大明宮含元殿と平城宮第一次大極殿との類似性について、報告書作成時から指摘してきたが、必ずしも大方の賛同を得たわけではない。最大の理由は、60年代の調査にもとづく復原では、含元殿土台に昇る3条の龍尾道が広場の北辺中央にあり、大極殿では広場の東西端に昇殿の斜道を設けることであった。91～95年の再発掘では、中央に龍尾道がなく、左右の闕基台に沿う斜道が発見され、これを龍尾道に当てたのであった。

中国の発掘成果にかんがみ、大極殿の含元殿の類似性を再検討し、大極殿の建設に際しては含元殿が強烈に意識されていることを指摘した。そして、敷地造成・宮殿配置・新しい建築素材のみならず、正殿自体にも共通性

を求め、唐様式ともいうべき四阿建築（寄棟造り）で高い身舎に裳階をめぐらす二重屋根の大極殿を提案した。

第81回 公開講演会

1997年10月18日

◆加藤允彦：遺跡の復元整備と地域の風景

平成元年度より始まった遺跡の復元整備を主とする事業は、それまでのどちらかといえば小公園的整備と異なり、遺跡の本来あった姿を視覚的に主張する手法である。それだけに、周辺景観が変化している現代社会のなかで異質な風景として出現することもありうる。歴史的な由緒を負って存在している地域の風景と、本格的な復元整備は無関係ではありえない。景観、ひいては風景は、法規を含む諸制約のなかでの人の広い意味での自然に対する働きかけの結果として認識される。働きかけの方向の指標として、アメニティーの確保や好ましい風景の創出がある。個性ある町の「らしさ」は多くその地域社会と文化遺産の関わりで醸し出されている。近時の発展的活動指標の下に多くの町で個性が喪失している。遺跡を含む文化遺産は個性ある町の風景を呼び戻す核ではあるが、多くの場合わずかな中心的部分しか保全されていない。遺跡の復元整備を行った町の周辺景観の保全のための条例化の努力もあわせて紹介した。

◆木村 勉：文化財建造物の復原と遺跡の建造物復元

文化財建造物の修復は百年の歴史をもつ。一方で、近年、史跡などにおいて城郭や古代建築の復元が盛んにおこなわれている。これらの事業は、関わる研究者や建築家や職人は同じでも、その目的や考える過程はまったく異なっている。一般の人々に、その違いやそれぞれの本来の目的が理解されなければ、これらは社会的な意味で共倒れのおそれをもっている。今日まで遺されてきた文化財建造物は歴史史料であって、積み重ねた推定によってかつての時代の姿にもどすよりも、厳密な事実を伝えることの方が重要である。遺跡に復元する建造物は、その地下に眠る遺跡をより豊かに理解するために展示する原寸模型としてとらえることができる。解明されない点を明示しつつ、ときには推論により大胆に復元を試みることも必要であろう。ふたつの事業のプロセスを解説し、両者の違いを明らかにするとともに、それぞれの役割とあり方を述べた。